生涯大学「海鳴学園」大学院
ふるさと研究発表会

●とき　**平成28年11月9日(水)**
午前9時30分～

●ところ　**老人福祉センター集会室**

《研究発表会次第》

1　開　　会
2　学長あいさつ
3　来賓あいさつ
4　研究発表
　豊田佐吉翁　生誕150年
　　「郷里：湖西に活きづく豊田佐吉」
5　指導講評　専任講師　鈴木芳朗　先生
6　閉　　会

ふるさと研究発表

豊田佐吉翁　生誕百五十年

郷里・湖西に活きづく豊田佐吉

障子を開けてみよ、外は広いぞ

豊田佐吉翁といえばこの言葉が最初に浮かびます。

大正七年、第一次世界大戦が終わりました。その頃佐吉は身内の者を集めて、一家をあげて上海へ行くと、中国への工場進出を口にしました。親族一同が話し合った結果、「今更危険を冒さなくてもいいのではないか」と言うと、「そんな小さな考えだから、日本人は外国人に馬鹿にされるのだ。そこの障子を開けてみよ、外は広いぞ」と親族を説き、佐吉一流の中国論に及びました。

上海行きは事業の利益を狙ったものでなく、当時は重大な日中問題があって、その打開のために国民外交的な使命感を持って、日中親善に尽くそうと考えていたのです。佐吉五十一歳でした。

皆さんもご存じのように、来年は豊田佐吉翁生誕百五十年になります。それを記念して湖西市では佐吉の日めくりカレンダーや、英訳本豊田佐吉物語の作成、子供バス見学会でトヨタ産業技術記念館を見学するなど、豊田佐吉翁に関する色々な事業が展開されています。

世界にはばたく郷土の偉人・豊田佐吉翁の偉大さを再認識していただきたく、研究テーマとし、今回は報恩創造に生きた佐吉翁の人柄と、湖西に活きづく佐吉翁の思い、豊田家の女性達、に重点を置き調査、研究いたしました

1867 ! 2017
豊田佐吉翁生誕
150年
静岡県湖西市

佐吉の年譜

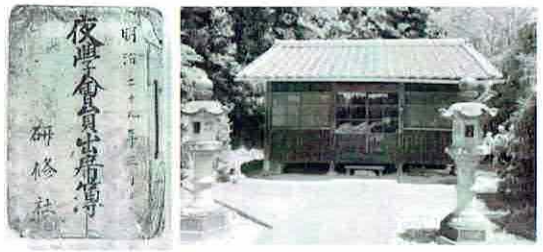
佐吉は、一八六七年慶応三年、遠江の国敷地郡（ふちのごおり）山口村に父伊吉、母ゑいの長男として生まれました。父伊吉は、農業の傍ら生活のために大工として働き、腕のいい職人として信頼を集めていました。佐吉が十五～十六歳の頃、世の中は不景気のどん底にあり、西遠地方でも吉津村は、特に地の利にめぐまれない寒村であったことから事のほか被害を受けました。そのような部落の状況を見て、佐吉は「郷里の貧乏を救わねばならない」と決意したのです。

父の助手として高等小学校で大工仕事をしている時、教師が『西

国立志編』の話をしているのを聞き、強い衝撃を受けました。

これは、サミュエル・スマイルズの『自助論』を編纂して道徳の教科書として使われていた本で、「天はみずから助くる者を助く」という有名な言葉で始まる明治期のベストセラーです。貧しい暮らしから身を起こして成功した偉人たちの人生が語られており、織機を発明したジェームス・ハーグリーブスらの挑戦には特に感動を覚え、織機の発明を志すきっかけになったと伝えられています。

明治十八年、『専売特許条例』が公布され、発明の奨励とその保護が打ち出されました。佐吉はこれに強い関心を持ち、発明家になろうと強い意欲を持ちましたが、寒村には手掛かりとなるものが何もなく、知識に飢えた佐吉は、村の青年達と観音堂に集まって、開いていた夜学会で、新聞や本を読みあさり、日本が近代国家への道を歩んでいることなどを学んでいったのです。



観音堂と夜学会会員出席簿

サミュエル・スマイルズの自助論（現代版）

西国立志編

明治二十三年、初めての発明である木製人力織機を完成。その後、糸繰返機（かせぐりき）・木鉄混製動力織機・広幅鉄製織機と、次々に発明を重ねていきました。

明治四十三年、三井物産とともに設立した豊田式織機から、営業不振の詰め腹を切らされた佐吉は失意の中に国替えの決心で渡米しましたが、米国機械恐れるに足らずと意を強くし、外遊から帰ってきました。帰国後、自動職布工場や紡織会社を設立。中国にも進出し、事業は大きく拡大していきました。

大正十三年、遂に『無停止杼換式豊田自動織機G型』が完成しました。五十余件の発明・考案に基づき、自働化・保護・安全及び衛生などの機構と装置を備え、生産性を一躍二十倍以上に、また織物品質も画期的に向上させて、世界一の性能を発揮しました。

無停止杼換式（ひがえしき）豊田自動織機（G型）

糸繰返機

豊田式木製人力織機と特許証

豊田式鉄製自動織機（T型）

豊田式汽力織機

発明した織機類

昭和五年、脳溢血に急性肺炎を併発して、十月三十日永眠されました。翁のたどった六十三年の生涯は、苦難また苦難、発明また発明の連続で、その波乱の一生を一貫して胸底に脈々として動いていたものは、常に純正無垢な、極めて旺盛な、人間的良心でありました。

ここで、佐吉の発明に関連する【手織り高機とG型織機】を紹介します

まず始めは、豊田市民芸館での拳母木綿手織り講座で使用している手織り高機です。佐吉の母が織っていた当時の織機です。手織り機は、たて糸の張り具合、よこ糸の引き具合、おさ打ちの強さにより、織りの仕上がりが変わります。

次に、トヨタ産業技術記念館での無停止杼換式豊田自動織機（G型）です。速さの違いはもちろんですが、よこ糸を自動的に補給するとともに、たて糸やよこ糸が切れた場合には自動的に停止するなど、佐吉が目指した究極の自動織機です。

そして、百年前に作られた自動織機がまだまだ現役で稼働しています。三重県津市の白井織布で伊勢木綿を織っているのは、一九一五（大正四）年に発売された「鉄製小幅動力織機Y式」です。佐吉は完全なる営業試験を行ってから販売するという考えでしたが、これはまさにその成果です。修理がしやすく、部品の交換ですんでいると若い専務が話してくれました。

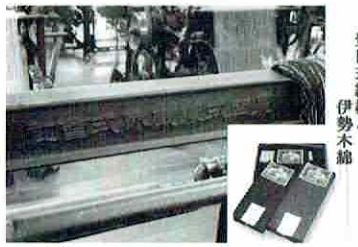
豊田市民芸館での拳母（ころも）木綿手織り講座

佐吉の日めくり

私たちは昨年、「佐吉の日めくり」の制作に携わることができました。三上市長や湖西市職員と寺子屋塾のメンバーの中に、海鳴学園院生も、市民の意見も取り入れようとの思いから参加することとなりました。豊田佐吉翁のことについて、深くは知らない私達でしたので、ついていくのがやっとでしたが、佐吉翁にはいろいろな名言や格言・逸話が数多く残されていることを知ることができました。佐吉記念館や妙立寺を訪ね歩く中で、感動を覚えたいくつかをご紹介します。

一生を賭してやれば、遂げられぬことはあるまい

十九歳ころのお話です。佐吉はこれまでにいろいろな機械作りに挑戦してきましたが、ことごとく失敗していました。佐吉の郷里は遠州木綿の産地として有名で、村人たちが農閑期の副業として手織り木綿を極めて原始的な機械で、一反の木綿を織りあげるのにも多くの時間と労力を費やしていました。ある時母が機を織



津市　白井織布㈱　豊田式織機と伊勢木綿

佐吉の日めくり

っているのを、じっと観察していた佐吉は、「人間の生活に大切なものは、衣食住である。大切な衣の材料が、こんな幼稚なやり方で織られているのでは、日本の将来にとって心もとなく、重大な問題じゃ、必ず誰かが解決せねばなるまい」とひらめき、発明の課題に迷っていた佐吉は、織機の改良に生涯を懸ける決意をしたのでした。

名人元旦を知らず

自動織機工場を自営して、佐吉が自動織機の考案に没頭していた頃は、織機王発明途上の最も緊張していた時代でもありました。一家をあげて工場に移り、職工達と寝食を共にして、研究に没頭していた頃のお話です。

佐吉は、宵の口から製図とにらめっこしながら間断なく煙草を吹かし考え続け、むずかしい顔をして、ひらめきが来るのを待っているのでした。夜は更けて行きましたが気が付きません。夜が明け朝日が昇ってきても、まだ研究室にいました。午前9時頃になって、片手に製図を握って工場へ飛んで行きましたが、工場には誰もいない。「おーい、誰かおらんか！」と叫んだが、返事をするものがいません。家のものが、「今日は元旦でございます」と言うと佐吉は大笑いした。

研究に没頭していた頃の、佐吉の様子が目に浮かびます。この話は、国定教科書にも掲載されました。

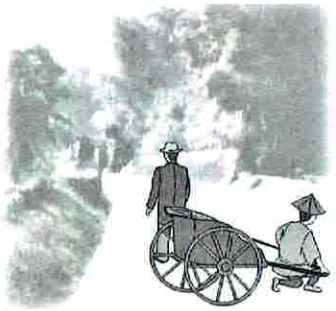
一生を賭してやれば、遂げられぬことはあるまい

車返しの坂

佐吉は、名古屋から郷里山口に帰る時には、必ず鷲津駅前の人力車を愛用していました。湖西地方にバスが運行されたのは、大正八年ですので、当時は人力車全盛の時代でした。鷲津駅近くには飯田・田中・小幡の三軒の車屋があり、佐吉のお気に入りは飯田屋でした。佐吉は駅に着くと飯田屋に寄って、まず煙草を一服し、世間話に花を咲かせ、郷里の様子を聞くのが常でありました。

山口へは、鷲津学校通りを経て、古見に出て、古見八幡様の横の小道を抜けて行くのが当時の道筋です。山口と古見の境が切通しになっていて、当時は急な坂でした。佐吉は人力車に乗っても必ずこの坂に来ると、丁寧に車夫にお礼を言って人力車から降りて歩いて帰ったといいます。

ある時車夫が、「代金はいらないから、家まで乗ってください」と言うと、佐吉は頭を横に振って、「家まで乗ることはできない。山口村は私を育ててくれた所、私の先輩や村の人達が汗水たらして働いている中を、車に乗って通ったら罰が当たります」と言ったそうです。それ以来、古見と山口の境まで来ると、車夫が「もう車返しの坂ですよ」と言って引き返したということです。



「家まで乗ることはできない。山口村は私を育ててくれた所、車に乗って通ったら罰が当たります」

常に村に感謝し、村人達にも誰とも隔てなく気さくに話され、村のおひまちにも出て和やかに会食したといいます。この話は、報恩感謝に生きた佐吉の人柄を偲ばせる逸話の一つです。

報恩創造

社会の恩に報いるために、織機の改良と創造に明け暮れた佐吉の生き方を最もよく表している言葉です。昭和六十三年、佐吉生誕百二十年の記念事業として、この言葉が孫の章一郎氏によって選ばれ、豊田佐吉記念館の母屋から佐吉の生家に通じる小道沿いの碑に刻まれています。また、鷲津小学校正門の上り坂の記念碑と鷲津小学校の時計塔にも書かれています。ちなみに時計塔は、昭和六十年に改築改良工事が完工した記念に玄関前に設置されたもので、太陽の無限のエネルギーを、電気のエネルギーに変えて動くソーラー太陽電池時計がついています。

百忍千鍛事遂全
（ひゃくにんせんたん、ことついにまっとうす）

「百を忍んで、千を鍛えれば、事は遂に達成することができる」と言う意味です。この言葉は豊田家の菩提寺である妙立寺の住職が、掛け軸にして豊田家に送ったものです。

妙立寺は日蓮宗のお寺で、父の伊吉は、明治三十五年に暴風雨で寺が破壊した時、再建委員として活躍したり、大正八年には多額の寄付をしたりと、伊吉の家族はみな厚く信仰していました。豊田佐吉記念館の床の間に掛けられています。

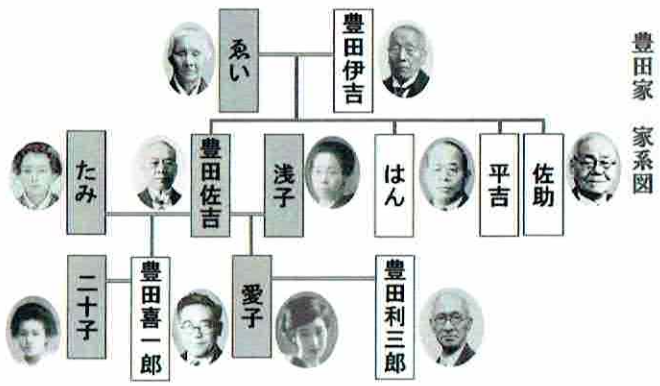
百忍千鍛事遂全

百を忍んで、千を鍛えれば、事は遂に達成することができる

佐吉を支えた女性たち

佐吉が織機に関するいろいろな発明が出来たのは、佐吉の努力のたまものであったことは皆さんご存知の通りですが、母をはじめ妻浅子の理解と協力なくしては出来ませんでした。私たちは佐吉にかかわった女性達にスポットを当て、調べてみました。

明治二十六年、たみと結



婚、翌年長男喜一郎が生まれましたが、乳飲み子を残したままたみは実家に帰ってしまい、しばらくは母ゑいが育てました。

明治三十年、佐吉は十歳年下の浅子と再婚。喜一郎を引き取り三十二年、長女愛子が誕生しました。

母　ゑい

白須賀宿、森次太郎の長女。山口村の豊田伊吉と結婚し、三男一女をもうけました。夫の伊吉は大工、ゑいは機織をして生計の足しにしていました。

佐吉は大工仕事もやらず、織機の研究にのめりこみ、父には厳しく叱られていた。ゑいは、夫をとりなし、自宅の裏山の納屋にかくまい、温かい食事を運び、息子の研究を見守りました。ゑいはきつかったが、厳しい中にも思いやりを持ち、佐吉、平吉、佐助の三兄弟ともども成功させたのは、ゑいの躾と教育が活きたからこそでした。

佐吉が名古屋で出世してからも、山口に帰ってくると、芋やら大根、人参など野菜類を大きな風呂敷に包んで持たせました。伊吉とゑいは、ずっと山口に住み女中さんもいましたが、じっとしていることができず、畑仕事をしていたのです。

母　ゑい

佐吉の母、えい。

喜一郎の母　たみ

川尻村の佐原豊作の三女・たみ。たみは佐吉と一緒に大工の修行をしていた佐原五郎作の妹でした。

佐吉とたみとの実質的な結婚生活は非常に短かく、一緒に住んだのは、東京での十ヶ月にも満たない期間でした。たみは、明治二十七年、豊田家で長男喜一郎を生んでいます。佐吉はその半年も前に出奔し、たみが出産した時には家に居ず、佐吉は何処からともなく戻ってきましたが、生まれた子供の名前を付けると再び何処へともなく家を出て行ってしまいました。

たみは二ヶ月後に乳飲み子の喜一郎を置いて豊田家を去り、育児放棄をした悪い母親のように言われることもありますが、豊田家と佐原家双方の話合いの結果であったと思われます。

後妻　浅子

市場村の林政吉の長女で、二十歳の時に佐吉と結婚。

浅子は働き者で、家庭のことに手を抜くことなどなく、主婦として、また工場の奥さんとして、佐吉の足らない面を補い、佐吉が安心して発明に専念できる環境を作りました。

従業員の食事を一日一銭ずつ節約して、前よりよいものを提供し、六十円貯めた話は、当時を知る人の間では有名です。破綻に瀕した佐吉の店に、後妻として嫁いだその日から、浅子はたすき掛けで働き、佐吉の大成を信じて疑うことはありませんでした。苦境のたびに浅子は目で笑い、「苦労には慣れていますわ」の一言は、佐吉にとっては何よりの励ましでした。

佐吉の後妻
浅子

また、先妻の子喜一郎を引き取り、二人の子供を分け隔てなく厳しく育てました。

国産自動車の開発に全力を尽くしていた喜一郎の疲れた様子を察知したとき浅子は、「喜一郎、何度も何度も同じことをやって、うまくいかないと疲れるなあ、お前のお父さんも作っては壊してまたつくる。何度も同じことを繰り返していたよ」と言って、喜一郎の心を慰めました。

浅子は佐吉没後、夫の偉大さを伝えることに心血を注ぎました。現在各所に残る佐吉の胸像の多くが浅子の手作りです。

昭和九年、佐吉の弟・佐助から本社工場に胸像を立てたいと何度も勧められました。そこで浅子は、佐吉翁の満五年の祥月に合わせて作ることになりましたが、その作り方は、写真を拡大して寸法を測りモデルに、土はイタリア油土を選んで、像の中には幾多の木切れを使いました。

一番大切な顔の製作には、気を落ち着かせて取り掛かり、わずか一日で似顔が完成。出来上がった原型を石膏に取り換えるのも自分で行い、石膏の像が見事に生まれた時、思わず手を合わせて亡き翁のご加護に感謝したとのことです。名古屋市覚王山の鋳金所に銅の製作を依頼、見事な像が生まれました。

この胸像は、鷲津中学校の玄関前や小学校の校長室、他にも妙立寺や妙源寺にも飾られています。

浅子の造った胸像

佐吉・浅子の
長女　愛子
トヨタ自動車工業初代社長
豊田利三郎の妻

佐吉の長女の愛子、22歳のとき。

娘　愛子　トヨタ自動車工業初代社長・豊田利三郎の妻

浅子の生き方は娘愛子の心底に模範として焼き付いていたことでしょう。兄喜一郎が仙台の高等学校へ行っていた頃、毎週のように女文字で手紙が届くので、恋文ではないかと下宿の叔母さんが心配したほど。それは愛子からでした。父母の近況や、またある時は裸のお金が入っていることもあって、その数は百通を越えていました。

喜一郎と愛子は、異母兄弟ながら、子供の頃からお互いにいたわり合いながら暮らし、美人で控えめで、普段はおとなしい貞淑な妻でしたが、夫利三郎が、自動車進出についての不満を漏らした時、愛子は、「兄のやることに間違いないと思います、父だって周囲から散々反対されながら自動織機を発明し、企業化に成功したのです。兄の自動車も同じように必ず成功するでしょう」とやんわり兄の意見に賛成し、夫利三郎と兄喜一郎とが会社の運営の基本方針をめぐって意見が異なった時も、必ず兄の味方になって重要な仲介役になっていました。

愛子と喜一郎

「会社はそれでよいでしょうが、兄の夢はどうなるのですか」と夫に詰め寄ったこともあり、そんな愛子の様子は、母にそっくりでした。

佐吉の甥・豊田英二の妻　寿子（かずこ）

時代の変化と共に豊田家の女性達は外に目を向けるようになってきました。英二の妻寿子は集団就職してきた若者たちが、見知らぬ土地で働いていて、心も身体も健康になるようにと、勤労センター「憩いの家」を設立しました。

豊田婦人ボランティア（現豊田ボランティア協会）を結成し、働く若者に食事でもてなしたり、悩みの相談相手にもなりました。「お元気？」と誰にでも声をかけ、母親のような温かさを持った人で、豊田の土地にボランティア精神を根付かせた人と言われています。

豊田家の女性達は、それぞれの立場で、このように堅実に賢く、生き生きと暮らしたといえます。自分が目立つことなく家族を大切にし、それでいて自分の存在をはっきりさせていました。その柱になっていたのは、浅子でした。

佐吉翁発明 動力織機発祥の地・半田市乙川訪問記

「柿を取ったのはわしだよ」佐吉翁の逸話の一つにこの言葉があります。舞台となった湖西市坊瀬の妙源寺は、市内川尻の妙立寺、白須賀の妙泰寺の下寺として地域に根付いた小さなお寺です。

今でも妙源寺で『豊田佐吉寺子屋塾』を行っていると聞き、海鳴学園の仲間と参加しました。白須賀妙泰寺を離れ、妙源寺に隠居された僧侶河村考照さんと、長女で住職の福永妙柳さんが、佐吉翁に関して熱心にお話ししてくださいました。

佐吉の住んでいた山口村と坊瀬の妙源寺は二～三キロ離れています。何故佐吉達は、遠くの妙源寺の寺子屋塾まで通ったのかとお聞きしたところ、当時山口村と坊瀬は同じ行政区であり、寺子屋塾を行っていたのは妙源寺しかなかったとのことでした。

河村さんが妙源寺に来られた時、この寺が豊田佐吉の寺子屋塾の跡と知り、その頃の資料を探しましたが、妙源寺は昭和三十一年の火災ですべてを焼失した後でした。

白須賀妙泰寺を探したところ、当時寺子屋塾の教科書として使われていた「四書五経と実語教童子教」が見つかったそうです。実語教童子教は万葉仮名で記されており難解なため、檀家総代の小池さんも協力して復刻版として発行されました。

妙源寺（湖西市坊瀬）

佐吉の甥・豊田英二の妻 寿子（かずこ）

豊田英二

寺子屋塾訪問の折に見せていただいた「はんだ郷土史便り」には、

① 湖西市は「豊田佐吉生誕の地」でありますが、半田市も「発明家豊田佐吉誕生の地」であることに誇りを持っていること。

② 自動織機完成の陰には、知多郡乙川村の石川藤八の多大な援助があったこと。

③ 佐吉と藤八が共同で設立した「乙川綿布合資会社」の跡地に、佐吉の業績を顕彰するため平成二十四年に記念碑を建てたこと。碑に刻まれた「豊田佐吉翁発明動力織機発祥の地」の文字は、湖西市妙立寺住職によるものであり、除幕式には三上市長も臨席された、と記してありました。

豊田佐吉翁 動力織機発祥之地 記念碑

『動力織機発祥の地・乙川』をぜひ訪れたいと思い、私たちは六月に乙川を訪問しました。

現地では、乙川綿布合資会社の跡地にお住いの『豊田佐吉とトヨタ源流の男たち』の著者で、顕彰事業に尽力された小栗照夫さんに案内していただきました。記念碑は、知多信用金庫乙川支店の一角に建っており、お店の中には、若き日の佐吉の写真や藤八の肖像画、綿布工場の写真などが展示してありました。

次に見せていただいたのは「石川藤八邸」です。藤八邸は、高い黒板塀を巡らし、蔵が二つもある立派なお屋敷でした。藤八邸の2階の隅の一室が佐吉の研究部屋として提供され、まもなく近くに試験工場も建てられました。

昼夜を問わず研究に没頭し、藤八邸と試験工場を行き来して、試験と改良が繰り返され、皆が寝静まってからも、階段をどんどんと音を立てて昇り降りするので、藤八さんは佐吉の部屋から直接工場に行くようにと別階段を設けた話が残っています。残念ながらその家には、現在も人がお住いでしたので、階段は見ることができませんでした。

藤八が佐吉のために作った専用の階段

明治二十九年、遂に日本製では初めての「木鉄混製動力織機」が水蒸気の力で動き出したのです。この完成を期に、藤八は資金提供を申し出、藤八が工場を建設し、佐吉は六十台の織機を製作して、翌年「乙川綿布合資会社」が設立されました。

この時のことを『豊田佐吉伝』では、「八年前、東京でふと思いついた翁の夢のような空想が、遂に現実の姿をあらわして躍動したのである。そして日本製の織機が動力で動いたのは、この乙川の里が嚆矢（こうし）であった、おそらく翁の生涯を通じての歓喜であったろう」と、記されています。嚆矢とは鏑矢（かぶらや）のことであり、昔、戦を始める合図に鏑矢を敵陣に射掛けたことから、「物事の始まり」の事を言います。佐吉の発明家とし

ての人生は、乙川の地から始まったと言えるのです。

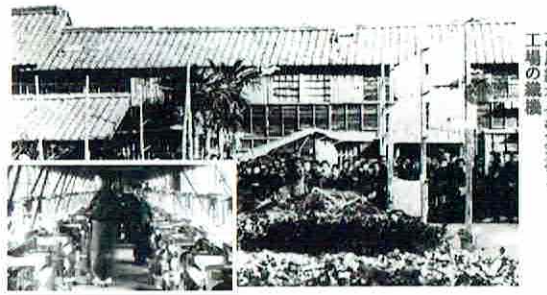
ちなみに、日本で最初に動力織機が使用されたのは、佐吉の生まれた年の慶応三年、薩摩藩が開設した鹿児島紡績所でイギリスから百台を輸入して、蒸気機関で稼働させています。プラット社製の紡績機械とベリスフォード社製の力織機が設置され、七人の外国人技師が指導にあたりました。

湖西に伝わる「車返しの坂」が、乙川にもありました。佐吉は事業家として成功した後も、何度も藤八邸を訪問しています。

その際、恩ある人の門前に乗りつけるわけにはいかないと、途中で人力車を降りて歩いて行ったといいます。藤八が五十一歳で亡くなった後、法事で浅子夫人を伴って参列した時も、寺の手前で人力車を下りて二人で歩いて行かれたそうです。

佐吉の報恩の精神は、長く乙川の人達にも語り継がれているようです。

開運山光照寺本堂
藤八の葬儀・法事に佐吉・浅子夫妻が参列しました



乙川綿布合資会社と工場の織機

今に伝える佐吉翁の思い

湖西市では今も佐吉翁の心を受け継いでいこうと行われている事業がいろいろとあります。

豊田佐吉顕彰祭

昭和三十八年、町長に就任した木村市郎氏は、精神的豊かさこそ、町村の根本と考え、郷土の偉人佐吉翁の「報恩・創造」の精神を町民の心とすべく、昭和三十九年十月三十日、翁の命日を顕彰の日と定め、毎年鷲津中学校の佐吉翁銅像の前で顕彰祭が行われており。今年は第五十三回を数えます。

奨学金制度

昭和四十二年、佐吉生誕百年を記念して、豊田家から湖西市に五百万円の寄付の申し出があり、町はご厚意に報いるため活用方法を検討の結果、奨学金制度を発足しました。

この奨学金制度は、一般の奨学金制度と異なり、給付された奨学金は返済する義務を必要としない特色を有しています。この奨学金制度の受給者数は、平成二十八年度現在、高等学校生徒から大学院生まで二百九十三名にも達しています。

平成二十七年度 豊田佐吉翁顕彰祭

豊田佐吉翁記念 奨学金制度
資格の抜粋

①親孝行
②世の中の役に立ちたいという志
③日本国民
④湖西市民の子弟
⑤学業および人物がともに優秀でかつ身体が健康
⑥学費の支弁が困難
⑦高等学校、工業高等専門学校、大学、大学院に在学中または翌年入学見込み

湖西少年少女発明クラブ

今年で設立四十周年を迎えます。想像力豊かな青少年の育成をめざそうと青年会議所が中心となり、市・学校関係者など多くの有識者が集まり、昭和五十一年に設立されました。現在の会員数は小学校三年生から六年生までの五十名ほどです。

親子凧揚げ大会

一月に運動公園で佐吉も愛した凧を親子で作り、揚げる行事で、本年で三十八回を数えます。

研究のまとめ

ふるさと研究発表に向けて佐吉翁の足跡をいろいろと訪ねてきました。佐吉の母が使っていた頃のはた織機を見学し、たて糸をかけるのにも多くの時間を要し、一反（十二メートル）を織り上げるには相当な日数がかかるとの説明を聞き、佐吉の母への思いを少しは理解できたように感じました。

豊田佐吉翁は静岡県の寒村に生まれ、郷里の貧乏を救わねばならぬという精神から、織機の発明に挑戦し、幾多の成功・失敗を繰り返し、世界に誇る無停止杼換式豊田自動織機G型を完成させました。これは信仰心が篤く、報徳の心を持つ佐吉一人の力だけではなく、親・兄弟・妻子・そのほか多くの方々に支えられてのことでした。

織機の発明王、佐吉の原点である湖西市。未来を担う子供たちが佐吉翁の報恩・創造の精神を受け継ぎ、モノ作りの街湖西市を世界に向かって発信して行くことを願っています。

未来に向かって

◆参考文献

郷土の偉人豊田佐吉　（湖西市教育委員会）
豊田佐吉とトヨタ源流の男たち　（小栗照夫　新葉館出版）
豊田佐吉　（池田宣政　ポプラ社）
豊田佐吉　（久保喬　偕成社）
豊田佐吉　（楫西光速　吉川弘文館）
生きる豊田佐吉　（毎日新聞社）
湖西風土記文庫　湖西の生んだ偉人豊田佐吉
（湖西市教育委員会　湖西市）
豊田佐吉傳　（田中忠治　トヨタ自動車工業㈱）
豊田喜一郎氏　（尾崎正久　自研社）
天馬無限（挿絵集）（トヨタ産業技術記念館）
障子を開けてみよ　外は広いぞ　（小宮和行　㈱あさ出版）
障子を開けてみよ　外はひろいぞ　（那須田稔　ひくまの出版）
若き日の豊田佐吉　（映画　堀内甲　東映㈱）
インターネット